

# MADNESS

written by HADEYA

## 1

枯渴。それは突然、やって来る。俺たちが会いに行くのではなく、向こうから会いに来る。

困った……ネタがない。一体、何を書く？

閃いた、核を描こう。核と言っても核ミサイルの事ではない。ここで言う核とは〈表現核〉の事。

表現の核は暴力、だ。暴力に変わる核は何か。答えは一つ——

マッドネス。

## 2

そんな訳で家を出た——小説のネタを探しに。近所の交差点を歩き、コンビニを目指す。

「京葉！」

女性の声で振り向いた。杉崎真亜也だった。セーラー服姿の真亜也は二人の男子校生を連れていた。エッジと言うチャラ男とユッキーとか言うボソボソ喋る根暗のオタクだ。

雑談を交わし、俺たちはセブン・イレブンへ入った。因みに……俺はアイスクリームを買った。

\*

申し遅れたが、僕の名は阿部由木男。ユッキー、と言う筆名で小説家を目指している。

とにかく僕たちはセブン・イレブンでアイスやジュースを購入した。季節は初春。場所は岩手県。

京葉は真亜也との会話に夢中。エッジはスナック菓子を頬張っている。僕はジュースを飲みながら新作の構想を練っている。

こうやって人生は続くのだと思った。永遠に幸せなのだと思った。あの時までは。

あの時——

2011年3月11日14時46分18.1秒。

その日、日本列島を未曾有の大地震が襲った。日本は二度と立ち直れない壊滅的なダメージを被った。

日本人が決して忘れる事が出来ない一日が始まった。

### 3

「地震だ、デカイ……デカイぞ！」

京葉が叫んだ。立っているのが、やっとの状態だった。揺れは長時間、続き、やがて緩やかに収まった。

「終わったか……？」

真亜也が京葉の右腕を引っ張った。

「逃げなきゃ！」

「何で！」

「ここは海岸！津波が来る！」

「まさか！」

「早く！」

走ろうとした。その時、一台の車がスキッド音を鳴らしながら突っ込んで来た。車はエッジを跳ね、そのまま壁に激突した。エッジが車と壁に挟まれ、上半身が九の字に曲がり、顔面をボンネットに叩き付けられた。

「エッジ！」

叫びながら京葉が走った。エッジは完全に車と壁の間に挟まれている。京葉が運転席に向かった。運転手は気絶している。何とかして、車をバックさせようと試みた。

ユッキーがエッジに駆け寄る。エッジは意識がない。首の脈もないし、心臓も止まっている。

依然、京葉は車をバックさせようとしている。真亜也が京葉の元に駆け寄った。京葉の肩を揺さぶり、怒鳴った。

「気持ち分かるけど、逃げないと！」

「ダチを置いて行けるか！」

京葉は運転手を担ぎ出そうとしている。真亜也が手伝う。

「波が来るぞ！」

通行人が叫んだ。真亜也は作業を中断し、海岸を見た。波が……大波が迫っている。

通行人が一斉に走った。真亜也は京葉の説得を続けた。

「京葉！このままじゃ、私たちも死ぬ！」

「エッジはまだ死んでねえ！」

「逃げないと！」

「うるせえ！」

真亜也はハンドバックからスタンガンを抜いた。暴漢に襲われた時の為、所持しているモノだ。

「御免、京葉！」

真亜也は京葉の首筋にスタンガンを宛がい、電流を放った。京葉が気絶する。同時にユッキーが別の車——付近に放置されたワゴン車を運転し、二人の前に急停車させた。

ユッキーは車から降り、真亜也と連携して京葉を後部座席に運んだ。京葉を後部座席に積むと、二人はワゴン車に飛び乗った。

真亜也が叫ぶ。

「ユッキー、早く出して！」

「掴まって下さい！」

叫びながらユッキーは車をバックさせた。バックさせたまま道路へ出る。未知のゴオオと言う重低音が聴こえた。波の音。

ユッキーはバックの状態でも道路を走行して行く。真亜也が前方を見た。フロントガラスの先に波が迫っていた。目と鼻の先に。

「もっと飛ばして！」

「これ以上は無理です！」

波が迫り来る。もう、すぐそこまで波は到達していた。

「駄目！ 波が来る！」

津波は三人が乗った、ワゴン車を丸呑みにした。

……そこから先は覚えていない。波に呑まれた事。車全体が波で流された事以外。

ユッキーは意識を取り戻した。真亜也が自分に心臓マッサージをしている最中だった。

「もう、大丈夫」

そう言って、ユッキーは上半身を起こした。そこはビルの屋上。真亜也に寄れば、ワゴン車は波でビルのエントランスまで流された。ビルの住人が手分けして自分たちを救ってくれたとの事だった。

助けてくれた人たちに御礼する為、ユッキーは屋上を歩いた。

京葉は眼下に広がる不条理な光景を目の当たりにし、呟いた。

「地獄だ……」

真亜也が京葉の手を強く握る。二人の元にユッキーが戻って来た。その顔は酷く青醒めている。

「……どうした、ユッキー？」

「マズいよ……メチャメチャ、マズい……」

「何があったの？」

真亜也が問うた。ユッキーは答えた。

「たった今、福島第一原発がメルトダウンした」

#### 4

「福島に姉が住んでるんだ」

ユッキーは告げた。京葉が答える。

「助けに行こう」

「だって、ここ岩手だよ」

「一つ方法がある」

真亜也が言った。ユッキーが尋ねる——どんな手？

「奥の手」

真亜也はそれ以上、言わなかった。

## 5

今、三人はヘリコプターに乗っている。事の経緯はこうだ。ビルの屋上で真亜也はスマートフォンを借りて、父に電話を入れた。奥の手とは資産家である父の事だったのだ。父は特殊部隊をビルに派遣。三人は特殊ボートで移動し、〈いわて花巻空港〉へ移動した、と言う訳だ。

ヘリの中で真亜也は隊員から一本のナイフを受け取った。役に立つと言われ。真亜也はハンドバックにナイフをしまった。

ヘリが福島に着陸する。そこからはオートバイでの移動。自衛隊が手配した、YAMAHAの二人乗りのオートバイをブツ飛ばした。

……結論から言えば、我々は無時に姉を救った。トラブルが起きたのは、その後だ。  
俺たちは謎の秘密結社——イルミナティと対決する事になる。

僕たちのリーダーは小川京葉。腕っぷしに自信のある生粋のファイターだ。

## 6

夜。オートバイで走行している時、そいつらが現れた。目の前の道路を車両封鎖し。  
京葉はオートバイを停車させた。待ってました、と言わんばかりにバラクラバを着用した連中——チーマーが騒ぐ。

「日本沈没だ！ 犯っちまおうぜ！」

連中は鉄パイプで京葉とユッキーを袋叩きにした。真亜也が叫ぶ。

「止めて！」

「姉ちゃんよお、俺たちと楽しもうぜ！」

連中は真亜也を殴った。抑え付け、派手に衣服を脱がせた。真亜也が激しく抵抗する。

「止めて！」

「うるせえ！」

真亜也が引っ叩かれた。連中は京葉を殴り続けた。真亜也と姉への暴行は続き、僕は——

立ち上がった。力を振り絞り。僕……俺の心はドス黒い感情が並々、漲っている。

僕は……勃起しながら拳の関節を鳴らした。連中を皆殺しにする意を決したのだ。

誰も本当の僕を知らない。何故、優等生である僕が幾度となく、高校を転校しているか。

戸籍に登録されている僕の実名はザック佐川龍2世。カニバリストの隔世遺伝の息子。人呼んで——

宴のジャンク・フード。

## 7

抑え、暴行されている姉と真亜也——どちらから救うか……二人同時が最も手っ取り早い。僕はそう結論付けた。

付近の暴漢魔の頭頂部をブン殴った。僕の手には石コロが握られていた。

流血し、前のめりに倒れる男の襟首を掴み、手荒く引き寄せた。羽交い絞めにし、右手の人差し指を男の左眼に突っ込んだ。眼球を繰り抜きながら闇夜に叫ぶ。

「キエエエエッ！」

一同が振り向く。僕は言った。

「女から離れろ！」

パーカー姿のリーダー格の男が告げた。

「何、狂ってやがる、手前」

右手が動いた。視神経に繋がれた男の左眼球を引き抜くと、そのまま食してやった。

「祭りだ、祭りだ！」

大声を発し、突然、僕は連中の中央に躍り出た。そして——

皆殺しにしてやった。こんな事は日常茶飯事だ。

京葉は連中に殺されていた。姉と真亜也の前に立ち、姉を殴った。

返り血で真っ赤に染まった顔で真亜也を見た。

「真剣な話があります」

「……ど、どんな？」

真亜也がゴクリと唾を呑む音が。僕は衣服を脱ぎ始めた。ズボンのベルトを外しながら。

思い切って告白した。

「好きだったんです、真亜也さんの事が。一目見た時から、ずっと好きだった。宜しければ——」

「駄目。今は」

「今しかありません」

僕は真亜也を抱いた。無理矢理。抵抗が激しかった為、首を絞めた。ピクリとも動かなくなった真亜也の隆奥に射精した。大量に、大量に白い精液をブチ撒けた。

ユッキーはまだ気付いていない。過度のプレッシャーにより、自分の精神が錯乱状態にある事を。

## 8

過去の話をしよう。僕が小学生だった頃の話だ。

僕は放課後の小学校に侵入した。そして初恋の人の上履きを盗み、臭いを嗅ぎながら自慰に耽った。女子トイレで。他にも女子生徒の歯ブラシやアルトリコーダーを嘗めた。体操着や水着も盗んだ。

我慢できなかったのだ。思春期の想いを。

僕には一度、夢中になると何が何でも、それを入手する傾向がある。この頃、僕は〈幸〉と言う女性に夢中だった。どうしても幸が手に入れたかったのだ。

今、僕は幸を手に入れた。幸に良く似た女性——真亜也を。真亜也を支配すると何とも言えない優雅な気分

陥った。それでも飽き足らず、僕は……  
彼女の血液を啜った。口を真っ赤に染めながら。その光景と言ったら……。

真亜也の血液は美味しかった。トマトジュースより遥かに美味しかった。

## 9

背後でガサガサ音がする。

振り向いた。そこにいたのは絶世の美女だった。見た事もないような、目も眩む絶世の美女。

「アフロディーテ。私をそう呼ぶのよ」

彼女に見惚れながら僕は答えた。

「はい、アフロディーテ」

「名案があるの」

「どんな？」

「簡単簡単。私と組めば良いの」

「……組んで何をすれば？」

「私にはどうしても許せない輩がいるの。火事場泥棒よ。無防備の住居を狙うなんて最低の屑のする事だと思える」

「同感です」

アフロディーテは僕の手を取った。

「さあ、行くわよ」

「ええ、付いて行きます。どこまでも」

こうして僕とアフロディーテ様は一軒の住居へ移動した。

富豪の住居へ。

## 10

住居に入ると、人間の屑の気配がした。火事場泥棒は懸命に無人の部屋で棚を漁っていたのだろう。物音で作業を中断し、逃げようとしている。

逃がさなかった。野郎の行く手を阻むと、怯える目を見ながら言ってやった——

火事場泥棒、生きて帰れると思うなよ。

野郎に飛び掛かり、取っ組み合いになった。僕の手にはアフロディーテ様から授かった金色のアイスピックが握られている。

首を刺した。それから野郎に馬乗りになり、メッタ刺しにしてやった。ああ、そうさ。気が狂ってるんじゃないか、って思う程、刺してやったぜ。

派手にKILL ME、派手にKILL YOUってな(ニヤリ)。

## 11

「合格よ——」

アフロディーテ様は続けた。

「あなたはテストにパスした」

「ありがとうございます」

「ここがどこか分かる？」

「ここは……」

住居だ。大富豪の住居。その筈だ。アフロディーテ様は首を振った。

「違うの。ここは住居じゃない。ここは記憶……海馬って言う脳の内部なの」

「……海馬？」

「誰も脳を持っている。ムカつく奴も全員。そう言った連中を仕留めるのが、貴方の使命。人間の脳に侵入して潜在的な欲望を抹殺する事」

「はい、分かりました」

「貴方に邪悪を嗅ぎ分ける嗅覚を与える」

こうして僕は脳の侵入者となり、邪悪を抹殺するハンター……コンバット・ジャッカルになったのだ。

## 12

ソナーのような機能が聴覚に備わった。邪悪を探し始める。

見付けた——事務所で女性に集団暴行を働くヤクザの団を。

パール、と呼ばれる超軽量のL字型の鉄パイプを手にドアの前に立つ。女性のくぐもった悲鳴と男性のゲスな笑い声が聴こえる。

今日は僕のデビュー戦。今一度、パールを握り締めた。髪は原色の金髪。マントはペンキで着色したニュージャクソン・ポロック。ゴーグルに革ジャン。ブルーのギンガムチェックのショートパンツに白いラバーソウル。

高級腕時計を見た。時刻は21時20分を刻んでいる。

カウントダウンを開始した。10、9、8……。ゼロまで待ち切れず、バールでドアのガラスをブチ割った。内側の鍵を開錠し、勢い良くドアを開けた。

「誰だ、手前は！」

答えず、飛び掛かった——集団に。

僕は暴れた。バールを振り回し、片っ端から屑野郎共をブチ殺して行く。

ゴーグルの下の目は血走っている。僕の心臓は高鳴っている。このスリル、そしてドロドロした粘着質のエクスタシー。このエクスタシーの名こそ〈マッドネス〉だ。

マッドネス……。それを知る者は少ない。しかし、それは確かに実在する。この高揚感。そして絶頂にグングン向かう爆裂的リビドー。ワナワナ震える全身が俺の興奮を煽る。ガンガンガン、煽りまくる。

**ブツ放せ、君自身を。君自身のマッドネスを。野次馬なんか気にすんな。**

……。気付けば、周囲にはヤクザの一団が血を流し、全滅していた。周囲には強姦され、啜りなく女性被害者と静寂が広がっていた。静寂が物足りず、僕は……。俺はオフィスチェアを掴み、窓に向かってブン投げた。

俺は叫んだ。金切り声で叫んだ。

俺の叫びは確実に君の鼓膜に伝わった。それから俺はズボンのジッパーを下げ……。ざまあみやがれ、クソツタレ。  
(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872